# 陶晶孫の日本時代 ——
## 九州時代の作品とそれ以後の作品との違いは何故生じたのか

廖　莉平

九州帝国大学を卒業してから東北帝国大学に進学した陶晶孫は、創作上において二年間ほどの空白期間があり、再び筆を起こしたのは1925年である。その間、日本の社会においては関東大震災という悲惨な出来事があったが、陶晶孫個人においては1924年３月３日に佐藤みさをとの結婚という喜ばしいこともあった。

1927年に出版された陶晶孫の最初の作品集『音楽会小曲』を一読してみれば、九州時代の作品と、1925年以後の作品との描きかたに明らかに違いがあることに気づく。何れも〈愛〉というテーマを中心に作品を書いているものの、社会に認められない禁断の愛を描く九州時代の作品に反して、それ以後の作品に現れる〈愛〉は総て世間に認められる正常な〈愛〉となり、九州時代のような〈愛〉は二度と出現することがない。また、九州時代の作品でよく目にする〈運命〉・〈死〉・〈幼年〉などの言葉もそれ以後の作品から姿を消している[1]。

しかし果たして九州時代の作品とそれ以後の作品には全く共通点がないのだろうか。少なくとも音楽に秀でた大多数の主人公が何れの時期の作中にも登場していることに容易に気づく。また、作品を吟味してみれば、〈放浪〉[2]という言葉が九州時代の作品にも、それ以後の作品にも、よく使われている。

この〈放浪〉については、従来の陶晶孫研究の中でも注目されてきた。例えば、中西康代氏は〈祖国に対して傍観者として作品を描いている〉陶晶孫は、中国人として日本で生活する〈異国人意識を〉〈拭いさることは不可能〉なため、〈日本にも中国にも祖国としての精神的安住の地を見い出すこと〉ができずに〈放浪者の感情へと流れて行くこと（波線は引用者。以下同様）〉しかできなかったと述べている[3]。また、中村みどり氏も陶晶孫の筆先の主人公たちは〈中国に目を向けながらもその身体は日本から切り離されず、両国の間に「放浪者」として留まっている〉と、指摘している[4]。両氏の論は、何れも陶晶孫が中国人であるということから判断して、主人公たちが日中の狭間に立たせられた陶晶孫自身を反映していると考えるものである。言い換えれば、作品中に現れる様々な〈放浪者〉たちは、幼児期から日本で教育を受けてきた中国人陶晶孫の自分のアイデンティティーがどこにあるのか日中の間で彷徨っている姿である。

ところで、日本時代の陶晶孫の作品に描かれている総ての〈放浪〉は上のような〈放浪〉の範疇に取り込むことができるだろうか。九州時代の作品は陶晶孫の大人世界に対する嫌悪感と、それに対立する純粋な子供世界に対する憧れという思念を秘めている[5]。こうしてみれば、九州時代の作品に描かれている出来事は中国人のみならず、日本人を含めどこの国の人でも起こりうることである。とすれば、九州時代にみられる〈放浪者〉は日中の間で彷徨っている〈放浪者〉と異質なものであるとも

考えられる。

本稿は、『音楽会小曲』に現れる〈放浪〉という言葉に焦点をあて、作品に見られる様々な〈放浪〉は一体どのような意味で用いられているのかを解明した上で、それらの差異をもたらした本源を探る。更に、日本留学時代における陶晶孫文学をどのように時期区分すべきかを検討する。〈放浪〉というキーワードを通して九州時代とそれ以後の作品とを比較分析することによって、九州時代における陶晶孫の作家像をより明晰に浮き彫りにしたいと考えている。

## 1 〈放浪〉の使用状況

日中における陶晶孫研究では九州時代及びそれ以後の作品を一括して、日本留学時代における陶晶孫文学として大雑把にまとめてしまう考え方もあれば[6]、関東大震災を境界線としてその前後に線引きすべきとする考え方もある[7]。こうした時期区分の何れについても筆者は完全には同意することができない。

陶晶孫の創作生涯を通してみれば、彼は主に三地点で執筆していた。それは、日本→中国→台湾→日本という流れとしてみられる。上述した前者の分け方に属する研究者は凡そその創作地の違いによって時期区分を考えたと思われる。後者を主張する研究者は関東大震災の前後に描かれている作品の〈性質が全く異なる〉と述べた上で、その特徴について次のように指摘している。

> 震災の後の陶晶孫文学は（中略）中国人留学生の恋愛をテーマとしてよく描くのだが、それは作者自身の生活そのままのものであり、日常の世界である。それ以前の陶晶孫の作品でも恋愛というテーマを扱ってはいる、しかし（中略）恋愛と言うよりも、運命というべきである、（中略）その上震災以前の作品中の人間関係は、ほとんどが死を以ってその帰結としている。震災後の日本での作品では死は扱われない、それらは現世的で、より直接的な文学だと言える[8]。

確かに引用文のように、震災以前の作品と比較してみれば震災後の作品で死が扱われていないことが、震災後の陶晶孫文学の特徴の一つであることには全く異論はない。しかしながら、前述のとおり、九州時代とそれ以後の作品との違いは、上のような結論とほぼ変わりがないことが分る。その上、陶晶孫が九州帝国大学を卒業してから再び筆を起こしたのは関東大震災後の翌々年の1925年である。震災以前の作品といい、九州時代の作品といい、作品の数は変わりがない。そのため、陶晶孫文学を関東大震災前後に境界線を画そうとも、九州時代に境界線を画そうとも、大差はないと思われがちである。しかし、ここで筆者はあえて日本留学時代における陶晶孫文学を九州時代と九州時代以後に分けなければいけないと主張したい。その理由については後述するが、ここではまず、この時期区分に従って各時期に登場する〈放浪〉についてみていきたい。

『音楽会小曲』に見られる〈放浪〉は以下のような作品に現れている。ここではさらに、〈放浪〉と語義の通じる〈漂泊〉・〈漂流〉・〈流浪〉をも視野に入れて考察を加えたい。

（表１）

| 時期 | 各期の作品数 | 作品に見られる〈放浪〉 | | 作品にみられる〈漂泊〉・〈漂流〉・〈流浪〉 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九州時代 | 5篇 | 2篇 | 「黒衣人」 | | |
| | | | 「洋娃娃」 | | |
| 九州時代以後 | 14篇 | 3篇 | 「暑假」 | 3篇 | 「哈達門的咖啡店」 |
| | | | 「音楽会小曲」 | | 「Café Pipeau 的広告」 |
| | | | 「水葬」※ | | 「水葬」 |

（※「水葬」に見られる〈放浪〉は気ままに振舞うと解釈）

上掲の表からわかるように、『音楽会小曲』の中に〈放浪〉は５篇の作品に登場している。その中で、「水葬」にみられる〈放浪〉は中国語の本来の意味――気ままに振舞うこととなり、「水葬」を含め「哈達門的咖啡店」「Café Pipeau 的広告」三篇の作品から〈彷徨う〉という意味を表す中国語として、〈放浪〉の代わりに〈漂泊〉・〈漂流〉・〈流浪〉が用いられていることに注目したい。詳細については後述するが、結論を先に言ってしまえば、「音楽会小曲」以後の作品になると、陶晶孫は日中における〈放浪〉の意味の違いに気付き、日本語〈放浪〉の意味を表すためにそれに相当する中国語〈漂泊〉などを使い始めたが、しかしながら、言葉がかわったと言ってもこれまで好んできた〈放浪〉に対する関心は一向に変わりがなかった。

次節から各時期における〈放浪〉及び〈漂泊〉などの言葉がどのような意味で用いられているのかについて検討していきたい。

## 2　九州時代の〈放浪〉

そもそも、〈放浪〉という二文字が初めて陶晶孫の作品の中に現れたのは、彼が最初に中国文壇で発表した戯曲「黒衣人」（初出『創造季刊』第一巻第一期1922.3）であった。「黒衣人」については拙論を参考にされたい[9]。ここではこの〈放浪〉に触れた部分だけを取り上げてみる。

「黒衣人」で〈放浪〉という言葉を口にしたのは兄の黒衣人であった。室内に入って兄のピアノを聞きながら死の意識を持つようになった弟 Tett に、兄黒衣人はこれまで二人が共に歩んできた道を回想し、自分たちを囲んでいる醜悪な大人たちから逃げるために、これから〈我们两人往世界上去放浪罢。（二人で世界を放浪しにいこう）〉と提案した[10]。

舞台背景を紹介する他の文の中で〈太湖〉という中国の地名が出ていなければ、戯曲「黒衣人」は日本と中国のどちらの国のことを描いているのか、非常に判断し難い。なぜなら、前景に現れる景色が中国で名高い太湖でありながら、登場する主人公 Tett が身に付けている洋服は当時の日本の小学校で生徒たちが着用した制服の一種とみられるからである。このような奇妙な構成は、日本留学を体験してきた陶晶孫文学における独特な手法と看做してよいだろう。

10歳で父親と共に日本にやってきた陶晶孫は、中国伝統文化の学習を中断し、全く異なった言文一致の日本文化を学び始めた。日中両国における文化の差異が日本に来た当初の彼に並々ならぬ衝撃を与えていたことは簡単に想像ができる。しかしながら、「亡弟陶烈的略伝」によれば、東京で過した中学校時代と高校時代が弟陶烈のみならず、陶晶孫にとっても非常に満足のいく生活であったことが

分る[11]。また、陶晶孫の小説の中にも東京に深い愛情と憧れを抱く描写がよく表れている[12]。そもそも故郷とは何も生地だけを言うのではなく、自分の根っこが府立一中で培われてきたと語る陶晶孫にとっては[13]、恐らく中国より日本、いや、東京こそが故郷と言えるだろう。かくして、陶晶孫は10歳までの記憶に止まった中国のイメージと、その後日本で体験してきた生活とをミックスして「黒衣人」に書き込んだと窺われる。

日中両国の要素が何れも織り込まれている「黒衣人」は、それまでの陶晶孫自身の成長過程と切っても切れぬ関係があったことはこれまで述べてきたとおりである。ところで、作品を通して当時の日本に対する憤慨と祖国に対する思いを訴える姿勢を構える同時代の中国人留学生と比べると、「黒衣人」では、日本あるいは中国に対するこのような感情を訴えることは一切見当たらない。

ここで、先に取り上げた「黒衣人」の作品で現れてくる〈放浪〉に再び立ち返ってみよう。弟 Tett を〈二人で世界を放浪しにいこう〉と誘った兄黒衣人は、別に日中両国の狭間に立たせられ、自分のアイデンティティーを確認できずに悩まされているわけではない。彼は自分たちを取り巻く環境から、更に言えば、俗世に属する大人の世界から逃げるために〈放浪〉という手段を選んだのである。これは前述した中西氏と中村氏の強調する〈放浪〉の意味合いと全く異質なものであることが分る。

さて、同時代の作品「洋娃娃」に現れる〈放浪〉はどのような意味が用いられているのだろうか。「洋娃娃」の作中には〈放浪〉という文字が三箇所ある。一箇所は、音楽会を開く老婦人を紹介する際、〈那是声乐家的某国的夫人、在他的放浪世界的生活中、要来开音乐会了[14]（あれは声楽家をしている某国の夫人で、世界を放浪する生活の中で音楽会を開きにきたのだ。）〉二箇所は、呆然として演奏会場に入った女生徒が眼を閉じたまま音楽を聴いている時に、〈放浪歌〉という歌が耳に流れてきたところである。この〈放浪歌〉を演奏したのはほかならぬ彼女の先生であった。この歌を演奏したのは彼女に別れを告げるためであったことは、後に教師からの置き手紙で分かる。この〈放浪歌〉はあたかもこれから教師が歩もうとする人生を暗示している。〈放浪〉に関するもう一箇所は、教師からの手紙である。〈我丢了一切、我要跟随那老妪、放浪在世界的老夫人、我做她的伴奏着、上世界上去了。（僕は全てを捨ててあの老夫人についていく。世界中を放浪している老夫人、僕は彼女の伴奏者になって世界に飛び込む。）〉世界に放浪に行くとはっきり書いていないものの、世界中を放浪している老夫人の伴奏者になるということは自分もこれから老夫人のように世界中を放浪することにほかならない。そのことを自分を慕う女生徒に暗に示しているのである。

「洋娃娃」を読んでもどこの国のことを描いているのか、全く掴めない。中国語で書かれていることから中国での出来事と判断してもいいものの、日本で創作したことから日本語を中国語に訳した物語として読まれても全く違和感を覚えない。国・民族という意識が「黒衣人」と同様、「洋娃娃」でも一毫も読み取れない。拙論「「運命」という視点からみた『木犀』と『洋娃娃』」で述べてきたとおり[15]、既に立派な大人になったピアノ教師は常に往事を偲んでいた。成長に対する抵抗感と、運命に対する無力感から教師は現実逃避するためにやはり黒衣人と同じ道——世界を放浪すること——を選んだのである。

現実から逃げるためにピアノ教師と黒衣人が同じ行動を取ろうと考えたことは、たまたま陶晶孫が創作するときに偶然に一致させたのであろうか。「黒衣人」と「洋娃娃」を除き、九州時代の他の三篇の作品には、〈放浪〉という二文字は出現していない。しかし、三篇における主人公たちが何れも現実世界に対する疎外感を感じていることは、これまで述べてきた「黒衣人」と「洋娃娃」と相通じ

ている。

「木犀」に登場する主人公素威はもともと東京で過ごしてきたシティボーイである。できれば東京の大学に進学したかったが、それは叶わず、田舎の九州へ〈流されてきた〉。九州での生活は彼が〈当てのない〉、〈悲惨〉などで形容している如く、決して楽しくなかった。往時を偲ぶ素威は、現実世界と〈甚だ隔たっている〉と、自覚している。あたかもそれに対応しているように、現実世界を描いた始めと結末の部分を除けば、作品の中心は過去をめぐる出来事である。素威は生身を現実の世界に置きながら、内心では楽しく過ごしてきた少年時代を求めている。一体それはいかなる意味を示しているのだろうか。現実世界に安住できず、過去と現実の間を絶えず往来する素威はこれまで分析してきた黒衣人、ピアノ教師と同じく、現実世界から離れようとする人物である。

九州時代の小説「剪春蘿」は、二人の男子生徒同士の恋愛物語を描いているものである。拙論「陶晶孫と精神医学──「剪春蘿」について──」で述べたとおり[16]、人為によって阻止できない成長の前で〈葉〉は、〈緑〉との純粋な愛を保つために死への道を選んだのである。「剪春蘿」は「木犀」と比較してみれば、主人公〈葉〉と素威は人物の年齢設定の差異があるためか、素威ほどは〈葉〉の現実世界に対する疎外感をはっきり語られていない。しかしながら、以下のような幾つかの場面から〈葉〉と彼を取り巻く環境との隔たりを垣間見ることができる。

例えば、田舎の学校に慣れない〈葉〉は、寝室のベッドの上に座ったまま家族のことを思い出す。今の学校には自分と同じ幼年の学生が一人もおらず、悲しいことが満ちている。それに反して、〈家にはお母さん、お祖母さんと自分の玩具がある〉。目の前に現れているいろいろな情景と、これまで過ごしてきた生活とを対比している中で、現在の寮生活ではなく、家族と共に過ごしたいという〈葉〉の気持ちを容易に察知することができる。

また、この学校に来させたのは〈すべて父親の名誉欲のせいだ〉と訴える〈葉〉に注目したい。作品の中でこの一句以外に〈葉〉がこの田舎の学校に入学した理由は一切言及されていない。しかし、このわずかな言葉から、田舎の学校に入学したのは〈葉〉本人が望んだことではなく、父の要求に応えるために強制的に入れられたことを、窺い知ることができる。さらに、家族宛の手紙の中で、学校が如何に悪いかや寝室が如何に不便かなどを語っている。前出の拙論で述べてきたように、〈葉〉が手紙を書いたのは父からの理解を求めるためであったが、一方、この手紙を通して〈葉〉が自分を囲む環境に如何に憎悪を感じているのかも窺われる。こうしてみれば、〈緑〉と親しくなるまでの〈葉〉は、なかなか周囲に馴染めず落ち着くことができなかった。〈緑〉と知り合ってから漸く現実世界と馴染み始めたと思ったものの、今度は〈緑〉の父からもたらされた不安感と人間を含む万物の成長に対する無力感を感じた〈葉〉は、再び現実世界からの疎外感を感じ、死の道を歩んだのである。

九州時代において、これまで述べてきた黒衣人、ピアノ教師、素威、〈葉〉のように、過去（少年時代）に対する憧れと、現実世界に対する疎外感を持つ人物たちは、実は九州時代の最後の作品「尼庵」にも表れている。兄と純粋な愛情を育んできた幼少時のことを懐かしく偲ぶ妹は、大人になるにつれて周囲の環境に馴染むどころか、常に圧力を感じ、兄、親に対する執着さえもなくなったという。最初、俗世界から逃げるために世間から遠く離れた尼寺に妹は身を隠そうとしたが、尼寺で漸く見つけた妙因との純粋な愛と心の安静も束の間、兄の登場によってそれらは打ち破られてしまう。結局、妹は〈葉〉と同様、過去の生活に対する名残惜しさがあるものの、過去に戻りたくても戻れない。一方、自分を取り囲む環境──現実世界が嫌で離れたくても離れることができない。最後に彼らを迎え

る場所は死の世界をおいてほかになかった[17]。

こうしてみれば、九州時代の陶晶孫にとっての〈放浪〉は〈中国に目を向けながら日本に留まり、日本の内なる異邦人として浮遊しつづけ〉、〈内なる異邦人という居場所に出口のない〉[18] ため彷徨うのではなく、ただ自分を取り巻く環境に慣れずに現実から逃避するためにどこかに逃げ出したいという意味を持つものである。

### 3　九州時代以後の〈放浪〉

前掲の表1から分るように、九州時代以後の作品に〈放浪〉が登場するのは「暑假」、「音楽会小曲」と「水葬」の三篇だけである。また、「水葬」にみられる〈放浪〉が中国語の元来の意味に用いられていることを考慮すれば、実際に〈放浪〉を〈さまよう〉という意味として用いている作品は「暑假」と「音楽会小曲」二篇しかない。九州時代以後の〈放浪〉の使用例は少ないと思われそうだが、この時期には日本語〈さまよう〉を表す中国語〈漂泊〉・〈漂流〉・〈流浪〉がよく用いられている。その変化は一体何を示しているのか。また、両者は陶晶孫にとって同様の意味で使われているのだろうか。さらに、この時期の作品にみられる〈さまよう〉と、九州時代のそれとは同質のものであろうか。本節ではこれらの疑問を解き明かしていきたい。

〈放浪〉、〈漂泊〉などの言葉は作中にどのような意味合いで用いられているのか、作品に沿いつつみてみよう。

> 我是走去走来到处都没有家庭的放浪人、所以只会讲架空的恋爱。（僕はあっちこっちに行ったり来たりする家庭のない放浪者だ。だから架空の恋愛しか語れないんだ。）（下線は引用者　以下同様）（「音楽会小曲」1925. 12. 6）[19]

「音楽会小曲」は「春」「秋」と「冬」という三つの副題によって構成されている。一つの副題のもとで独立した一つの物語が描写されているが、何れも音楽に通じる主人公達の恋愛物語である。九州時代以後に最初に現れるこの〈放浪〉と、これまで考察してきた九州時代にみられる〈放浪〉とは全く異質なものである。確かにこの〈放浪〉が用いられている「冬」の節だけをみれば、男性教師と女子生徒という人物設定には、九州時代の作品の名残が多少残っているとみられる。しかし、大人世界に嫌悪感などを抱く九州時代の主人公たちと比べると、この作品における主人公にはそのような態度が少しも見当たらない。

作品の第一部分に当たる「春」をみてみると、これまで陶晶孫の作品の中に全く現れてこなかった言葉が目を引く。それは主人公が自ら女性相手に打ち明けた〈僕は支那人だ〉という言葉である[20]。この台詞がなければ、日本を背景とするこの作品は日本人の物語として読まれても全く違和感がない。しかし、このようなわずかな言葉が加わることによって、作中人物たちの言動には新たな解説を加えることができる。つまり、この作品にみられる〈放浪〉は、単にあっちに行ったりこっちに行ったりする単純な行動を表すだけではなく、定まった住所がなく日中の間を往来している一人の中国人の彷徨う姿を暗に表している。

> 还是他戴小学帽时候听留日中国同盟会的成立、跳过他的心筋、今天已经没有希望与中华民国、

他只想他久留日本、已经不能合中国人的国民性、他觉得他是世界上的放浪人、他情愿被几位同期留日的同学以为久留日本而日本化、他要唱音乐与他的心中了。（まだ、小学生の帽子を被っていた頃、彼は日本に留学している人々が中国同盟会を設立したことを聞くと、胸がどきどきした。が、今はもう中華民国に期待をしていない。彼はただ日本に長く留まりたいだけだ。中国人の国民性とはすでに合わなくなり、自分が世界の放浪者であると感じている。何人かの同期の中国人留学生に長く日本にいたため日本化してしまったと思われても、彼は自分の内心を音楽を通して歌いたくなった。）（「暑假」1926. 9）

この作品の冒頭の部分に〈最近、彼は熱心にピアノを弾いている。二年後にどうしても中国に帰らなければならないので、その前にベートーヴェンの後期のソナタをしっかり身に付けたいと、彼は思っているからだ。〉という文章がある。〈二年後にどうしても中国に帰らなければならない〉という言葉から、本人は帰国を望んでいないと分かる。上の引用文にあるように、むしろ、〈日本に長く留ま〉ることを切に望んでいる。また、引用文から、彼が中国に帰りたくない理由を垣間見ることができる。それは、〈世界の放浪者〉と自認する彼が祖国の発展を当時の〈中華民国に期待していない〉からであり、自分が中国人でありながら〈中国人の国民性とはすでに合わなくな〉ったからである。日中両国の間に立たされ、苦渋の選択をしなければならない一人の中国人の内心が生々しく描かれている。それは母国である中国に帰るか、それとも親しみを感じている日本に残るか、という陶晶孫の当時の心境をありのままに反映しているといえるだろう。

ここまでみてきたように、この時期にみられる〈放浪〉――母国に疎外感を感じ、異国に安住を求める一人の中国人の彷徨いは、何れも中村氏らが指摘した〈放浪〉と同じ意味を示している。

前述のように、この時期に〈放浪〉の代わりに、それと語義の通じる〈漂泊〉などの言葉も現れている。これらの言葉に、陶晶孫は一体どのような思いを寄せていたのだろう。

他在北京街上漂流、时候正是严冬。（彼は北京の街を彷徨っていた。季節はちょうど厳冬だ。）（「哈達門的咖啡店」下線引用者。以下同様）

作品の末尾――〈又漂流到北京街上去了（また北京の街を彷徨いにいく）〉が、作品の冒頭に当たる上記の引用文と呼応している。また、北京にいた理由を説明する作品の最初の部分にも、ほぼ同じフレーズ――〈在北京街上漂泊〉〈漂泊北京〉〈漂流在北京街上〉が、繰り返し描かれている。〈北京を彷徨っている〉という言葉から登場人物が不安定な状態に陥っていることをはっきり読み取ることができる。どうしてこのような精神状態に追い詰められていたのだろう。その続きに、この種明かしをするような文章が描かれている。

この時、彼は猛烈な旅愁を感じたのだ。世界のどこが彼を受け入れてくれるだろうか？故郷だろうか？"何もない"故郷には、彼は行く訳には行かない。日本だろうか？彼も日本のことが嫌いではない。むしろ日本での研究生活に愛着を感じている。しかし、金がなくて日本に住むことができない。こうして、彼は北京を選択するという結論を出した。そして、今彼は北京にきた――それで彼はまさにStrangerの苦悩を感じているのだ。

上掲の引用文から、日本に残りたい、しかし、中国に帰らなければならない、という苦渋の選択を迫られた主人公が、北京を流浪せざるをえなかったことを窺い知ることができる。一人の中国人として、そして、大家族の中の長男として生まれてきたという宿命を背負った陶晶孫は、最終的に自分の回帰する場所が中国しかないと悟りながらも、祖国に疎外感を感じる。一方、これまで自分の文化の母体を育んでくれた日本に深い愛着を感じながらも、日本に背を向けなければならない。これは、正しく異文化の中で育てられた一人の人間の心の葛藤である。こうしてみれば、「哈達門的咖啡店」にみられる〈漂流〉、〈漂泊〉という言葉は、これまでみてきた「暑假」、「音楽会小曲」にみられる〈放浪〉と全く同質のものである。

就叫我们老板开咖啡店罢、算是他漂泊的连续。（いっそボスにカフェでも開かせよう。それも彼にとっては放浪の続きといえるだろう。）（「Café Pipeau 的広告」）

他赠他的海外"漂泊"给许多文艺家们（後略）。（彼は自分の海外での放浪生活を文芸家たちに贈る。）（同上）

「哈達門的咖啡店」と同じく「Café Pipeau 的広告」にも、政府から奨学金を削減され、途方にくれて中国に帰らざるを得なかった一人の中国人が描かれている。職探しのために中国に帰ったのであることは、「哈達門的咖啡店」のようにはっきり書かれていないが、「ボスにカフェでも開かせよう」という言葉から、主人公が帰国したのは職を探すためであったことが推察できるだろう。これまでの海外生活を〈漂泊〉と形容し、一方、これからの中国での生活——カフェを開くことも、〈漂泊の続き〉と喩えている。つまり、〈海外＝漂泊〉・〈国内＝漂泊〉という図式から、外国でも母国でも自分が安住する場所を見つけられない主人公は、「哈達門的咖啡店」の主人公と同様、世界中に自分を受け入れる場所を探し続けているのである。

他们大概是流浪世界的人、也必是不得意的人们了、不过赌是太不好了、太放浪了。（恐らく彼ら（中国人——引用者注）は世界を流浪している人々でしょう。それもきっと不遇な人々です。しかし、賭け事をするのはあまりよくありません。気ままにふるまいすぎます。）（「水葬」1927. 3. 20）

上掲の引用文は、主人公静成と母親が、船の中の中国人ボーイによって中国人の群れの方に追い払われたとき、賭け事をしている中国人が目に入ってきた場面で、母親の発した感慨である。ここで注目したいのは、〈流浪〉と〈放浪〉二つの言葉が同時に現れていることである。

これまでみてきたように、九州時代以後の作品に見られる〈さまよう〉を表す中国語——〈放浪〉であれ、〈漂泊〉・〈漂流〉・〈流浪〉であれ、いずれも日中の狭間に立たされた一人の中国人の苦しむ姿を明白に表している。「水葬」に描かれている、国内で思いどおりに行かない中国人たちの姿は、自ら〈中国人の国民性にはすでに合わなくな〉ったと語る「暑假」の主人公と、或る一面において相通ずる要素を内包している。確かに、中国で冷遇され、居場所が見つからず、世界を放浪するまでに追われた中国人と、中国に疎外感を感じ自ら世界を放浪したいと語る「暑假」の主人公たちとは全く

違った人物であるが、母国に安住の地を見つけられずに、母国と外国との間で彷徨っている点においては、「水葬」にみられる〈流浪〉はこれまでと同質なものといえる。

ところで、ここでの〈放浪〉は、上述のように中国語の元来の意味で用いられている。これまで論じてきたように、10歳で日本にきた陶晶孫は母語である中国語より、かえって日本語のほうを流暢に使いこなすことができた。中国語で書かれた作品の中にも日本語がそのまま頻繁に用いられている[21]。それゆえ、中国語〈放浪〉に対する理解も、恐らく「暑假」を書き終えるまで、日本語〈放浪〉と同じものだと、陶晶孫は考えていたに違いない[22]。何かの機会に中国語〈放浪〉の元来の意味を知り、これまで好んできたこの言葉を〈漂泊〉・〈漂流〉・〈流浪〉に改めたのである。上の引用文のように、日本語〈放浪〉を表す中国語〈流浪〉と中国語〈放浪〉の元来の意味と両者を同時に表現していることも、彼に〈放浪〉に対する理解の変化があった証左となる。しかしながら、用語が変わっても、〈漂泊〉・〈漂流〉・〈流浪〉の言葉に秘められている主人公の心境は、九州時代以後の作品にみられる〈放浪〉と一致している。つまり、陶晶孫は〈放浪〉における日中の違いに気付いた後も、日本語で言う〈放浪〉に執着し続けているのである。

## 4　日本留学時代におけるそれぞれの〈放浪〉の異同とその生じた原因

これまでみてきたように、取り巻く環境に慣れずに現実から脱出したいという九州時代にみられる〈放浪〉と、中国生まれ日本育ちの特色を持ち、日中両国の何れでも魂の安住を得られないという九州時代以後にみられる〈放浪〉と、その二種二様の漂泊者の姿が陶晶孫の作品に共存している。同じ日本留学時代に創作されたこれらの作品になぜこのような違いが生じたのだろうか。ここで、陶晶孫の生い立ち及び執筆当時の陶晶孫を取り巻く環境からこの疑問を解き明かしたい。

10歳で海を渡り、日本にやってきた陶晶孫は、東京の錦華小学校に入り、その後、府立一中→第一高等学校という当時のエリートコースに沿いつつ、進学してきた。一高を卒業してから、そのまま東京帝国大学に進学するのは、自然かつ当然な道だと、同時代の人々はそう思っていた。まして、成績が優れていた陶晶孫は、それ以上に思い込んでいたと考えられる。また、これまで、趣味として身につけてきた音楽、彫刻、絵画などを、彼は当時最先端を走っていた帝国の都――東京で続けたかったに違いない。しかし、父親の命令で九州帝国大学を選ばざるを得なかった。これまで、同時代の日本の若者、特に同時代の東京に住む若者と共に歩んできた陶晶孫にとっては、目に映る福岡は辺鄙で無味乾燥な町に過ぎなかった[23]。

左遷されたかのように、九州に流れてきた陶晶孫にとって、これらは全て運命としか言いようがなかった。しかし、この運命を克服できる唯一の手段といえば、自分が成長しないということしかない。つまり、幼少年のままでいられれば、東京から離れることはまずない。しかし、現実世界では運命に逆らい成長を阻止することができなかった陶晶孫は、結局、創作という手段を手に入れ、医学における実験的方法を用い、作品を通して自分の思考を訴えることしか出来なかった。そのため、九州時代の作品を俯瞰したところ、〈運命〉や〈幼年〉などの言葉、あるいは、俗世に対する嫌悪感と幼年時代に対する憧れが、何れの作品にも表れている。このように、常に現実（九州での生活）と過去（東京での生活に対する思い）の間を往還している陶晶孫であったが、一旦九州から引き揚げると、そのような思いは途端に消えてしまう。従って、それ以後の作品からは、〈黒衣人〉〈素威〉などのような、現実と過去の間で彷徨う主人公たちの姿も同時に消えることになる。前掲の小崎氏は、九州時代の作

品とそれ以後の作品との違いは、関東大震災からもたらされたものだと指摘しているが、今まで考察してきたように、福岡から引き揚げたとたんに、陶晶孫の心境ががらりと変わり、作風に影響を与えたことは明らかである。

ところで、前述したとおり、九州時代の作品は中国の地名がなければ、日本人が書いた作品として読まれても少しも違和感を生じない。それは正しく、これまで述べてきた九州時代の作品に秘められた陶晶孫の思念と深い関係がある。九州時代における陶晶孫は、都から地方に流れていった当時の東京人の行動や思考と、全く軌を一にしている。当時の陶晶孫は自分が中国人であることを全く自覚していなかったわけではなく、九州帝国大学に入ってから、郭沫若をはじめ多くの中国人と付き合ってきた陶晶孫は、常に自分が中国人であることを自覚していたはずである。それにもかかわらず、九州時代における陶晶孫が最も関心を持っていたのは、中国人という認識より、自分の文化の根ざすところ——東京に戻りたいということに他ならなかった。そして、その思いを作品の中で〈放浪〉の二文字に仮託したのである。そのように見るなら、この時期の作品にみられる中国の地名は、唯場所の記号にすぎず、日本の対立項として用いられているわけではない。中国という概念は恐らく九州時代の陶晶孫にとって稀薄であったと考えられる。

さて、九州時代以後の作品にみられる〈放浪〉は、東京と日本の地方都市の間で彷徨う九州時代の〈放浪〉と違い、日本と中国両国の間で彷徨う一人の中国人留学生の姿である。両者における〈放浪〉の意味は明らかに変化した。その変化は単に言葉における意味の変化だけに留まらず、九州時代以後の陶晶孫の内部で何らかの意識の変革が起こったことをも表している。一体、九州時代以後の陶晶孫にはどのような意識の変革があったのだろう。

まず、九州帝国大学を卒業した1923年3月から、日本を引き揚げた1929年1月に至るまで、実証的な資料と自伝的な小説を基に、陶晶孫を巡る出来事を時間順に整理してみよう。

(表2)

| 年月日 | 自伝・資料からみられる出来事 | 自伝的小説からみられる出来事 | 陶晶孫に関わる政策と事件 |
|---|---|---|---|
| 1923. 3. 30 | | | 「対支文化事業特別会計法」による「支那学生学資補給」が発足。 |
| 1923. 4 | 東北帝国大学の物理学教室と医学部の生理学教室に同時に入る[24]。 | S大学の物理教室に入ると生理教室の助手になる。(「女学校的訪問」) | |
| 1923. 夏休み | 一時帰国。上海と北京で友人達と会う[25]。 | 最初の北京での滞在を描いている。(「哈達門的咖啡店」) | |
| 1923. 9 | | | 関東大震災が発生。 |
| 1923. 3〜1924. 3 | 官費から一年間の実習費用を貰う[26]。 | 官費から一年余りの実習費を貰う。(「哈達門的咖啡店」) | |
| 1924. 3. 3 | 日本人佐藤みさをと結婚。 | | |
| 1924 | | 「支那学生学資補給」申請に不合格。(「理学士」) | 「特選支那留学生」制度は1924年から実施。 |
| 1924年秋から | | 研究室の助手として半給をもらえるようになる[27]。(「理学士」と「特選留学生」) | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1924の後半から | 中国に半年ほど滞在[28]。 | 北京と江南での職探しについて描かれている[29]。(「哈達門的咖啡店」と「Cafê Pipeau的広告」) | |
| 1925. 1 | 北京から日本に発つ[30]。 | | |
| 1925. 4 | 「特選支那留学生」に選ばれる[31]。 | 特選留学生に選ばれる[32]。(「特選留学生」) | |
| 1925. 7. 22 | 特選支那留学生として修学旅行を申請する[33]。 | | 「特選支那留学生陶熾ニ修学旅行費支給方ニ関スル件」 |
| 1926. 6 | 医師免許証を受ける[34]。 | | |
| 1926. 9 | 東京帝国大学医学部助教授を拝命し、泉橋慈善病院で医師として働く。 | | |
| 1928. 1 | 現時点でも特選支那留学生として在籍している[35]。 | | |
| 1928. 8 | 博士論文を書かずに東北帝大を中退。 | | |
| 1929. 1 | 日本を引き上げる。 | | |

〈放浪〉が初めて九州時代以後の作品に現れたのは1925年12月に書かれた「音楽会小曲」である。上掲の表2と照合してみれば、それは既に〈特選支那留学生〉として東北帝国大学に在籍していた時期である。毎月100円ぐらいの奨学金をもらっていた陶晶孫は、月40円の手当てしかなかった研究室の助手時代と比べると、非常にゆとりのある生活を送っていたと考えられる。それにもかかわらず、なぜこの時期からこれまで陶晶孫の中で薄れがちだった中国人意識が芽生えてきたのだろう。また、進学した東北帝国大学が九州帝国大学と同じく地方都市にあるにも拘わらず、この二つの町に対する心境に何故そのような差異が現れたのか。九州時代とそれ以後にみられる〈放浪〉の相違を生じた原因を明白にするためには、この二つの疑問を解き明かさなければならない。

まず、同じ地方都市である福岡と仙台に対して明らかに異なる感情を抱いたのは、次の二点から説明が出来る。

一つは、東北帝国大学が位置する仙台は東京からの距離が九州と比べ、遥かに近く、陶晶孫は頻繁に上京することが可能だったからである[36]。そのため、九州時代のように東京に対する思慕が自然と薄れていく。もう一つは、後に妻になる佐藤みさをが仙台にいたからである。ここでは紙幅の都合上、二人の恋愛の経緯については触れないが、佐藤みさをが、姉佐藤をとみと郭沫若の暮らす家に同居していた陶晶孫と初めて会ったのが、1922年の夏であったことは押さえておきたい[37]。

次に、これまで影を潜めていた中国人意識がなぜ1925年になって蘇ってきたのか。作品にみられるこの変化は、無論作者が創作する際に突発的に現れてきたものではなく、作者の内部に蓄積されてきた思いを表していると言ってもよい。ところで、いかなる出来事が陶晶孫にそのような思いをさせたのだろう。上掲の表2から1925年前後の彼をみてみると、この時期に彼には三つの悩み事があった。

一つは、1924年3月3日に日本人佐藤みさをと結婚したこと。今まで只管父親に従順だった陶晶孫は、初めて自分の意志で結婚を決めることができた。それは、彼にとって何よりもうれしかったに違

いない。しかしながら、佐藤みさをとの結婚は凡て順風満帆に行われたのではなかった。澤地久枝氏の記述によると[38]、佐藤みさをの親を含め彼女の親戚が〈うちからシナ人と結婚するような娘を出しては御先祖様に申しわけがない〉と非難し、結婚式には誰も参加しなかったことが分かる。やがて、〈結婚後に挨拶に訪ねた次女の婿（陶晶孫――引用者注）をすっかり気に入って、いい親子関係ができあが〉り、陶晶孫と佐藤みさをの二人の間でも〈中国人と日本人の結婚のむずかしさなど、深刻に考える必要のない暮らし〉が始まったが、結婚前、そして結婚式当日に味わった佐藤家からの様々な軽蔑は彼にとって容易に消し去ることのできないものだったはずである。中国人の血筋が流れていることを別にすれば、陶晶孫は普通の日本人と変わらず、それどころか、当時の東京のモダンボーイが備えていた要素を残らず持っていた。だが、中国人というだけで、そのような侮辱を受けなければならなかった陶晶孫は、中国人を排除しがちな日本社会の実状を初めて思い知らされたといってよいだろう。九州時代以後の作品に現れる主人公たちが、日本人女性によく〈まず、言っておきますが、僕は中国人です〉というシーンがある。それは結婚を巡って嫌というほど味わった屈辱感から生じたトラウマと看做してよい。

二つは、1924年から1925年にかけて、〈支那学生学資補給〉と〈特選支那留学生〉という二つの奨学金を申請したこと。確かに、陶晶孫本人は小説以外ではこの二つのことについて全く言及していない。そのため、事実であったかどうか、これまでの陶晶孫研究では曖昧不明瞭されてきた。しかし、今回東北大学史料館の協力で、それが事実であった事が明らかになった。本論文の趣旨とやや外れるのでこれ以上触れないが、作品では、陶晶孫と見られる主人公無量は奨学金を申し込むに当たって、経理員をはじめ中国人留学生から攻撃される。作品には表立って攻撃者を批判する描写が見当たらないものの、〈外国にいる中国人留学生の一種の習性と思いあたった〉という語りから、陶晶孫の中国人留学生に対する憤慨と失望は暗に伝わってくる。それは、同時代の中国人留学生に対する陶晶孫の見方の一端を表わしている。一方、傍観者あるいは部外者として中国人留学生を観察する陶晶孫のスタンスから、中国を母国として認め、それに対する愛情がいかに薄いものであったかが窺える。

かくして、日本人である妻の家族から容易に認められない一方、完全に中国人に成りきって日本で生活することが出来ない陶晶孫は、この時期から中国人にも日本人にもなりきれないディレンマに陥り、自分の本当の居場所を探し続けていたと考えられる。しかし、結婚後、妻の両親が中国人である陶晶孫に対する偏見を持たなくなり、また、1925年以降〈特選支那留学生〉に選ばれたことによって、一旦、浮き上がりかけた、自身のアイデンティティーをどこに求めるかという悩みは、陶晶孫の心の底に再び沈下し、その影は小さくなっていった。それゆえ、関東大震災後に日本文壇に登場する新感覚派に陶晶孫は直ぐ引きつけられ、再び筆を起こし創作したのは外でもなく「温泉」に代表される新感覚派からの影響が強いとみられる作品群である[39]。

ところで、日本人からの偏見や、奨学金を巡る諸々の苦悩は、陶晶孫の努力によって解決できたとみられるが、この時期から、もう一つの悩みが彼に付き纏い始めたのである。それはほかでもなく就職のことである。

自伝的な小説「理学士」の主人公無量は、先輩である中国人留学生Aの就職の経緯を耳にした際に、〈就職にまだ取り立てて興味を持っていなかった〉。金の苦しみをまだ味わっていない無量の語りから、当時の陶晶孫の内心をも垣間見ることができる。つまり、少なくとも1924年の3月までは、陶晶孫は就職について殆ど考えていなかったといえる。しかし、1924年4月から奨学金が打ち切られ、〈支那

学生学資補給〉の申請も不合格となり、生活は一変し貧困のどん底に落ちた。そのままでは研究どころか、所帯を持ったばかりの彼にとって、家族をまず支えていくこともままならない。窮地に追い込まれた陶晶孫は、やむを得ずこの年の後半から研究を中断し、職を探すために中国へ発ったのである。

〈友人と葡萄の木の下で葡萄を貪るように食べ（中略）緑の木陰で親しく語り合った〉と回想する一昨年の夏の北京への旅と比べると、今回の旅は心安らかな旅とはいえなかった。自伝的小説「哈達門的咖啡店」から、はっきりとこの間のことを察することができる。このような違いが現れたのは、恐らくこれまでの帰国が陶晶孫にとって、一訪問者として中国に触れてきたにすぎなかったのに対し、今回の就職を意識した帰国ではリアルな形で自分が中国人であることを思い知らされたためである。ところで、就職活動によりもたらされた苦悩は〈特選支那留学生〉に選ばれたことによって、一時的に棚上げすることができたが、根本的に解決することはできない。なぜなら、彼は学生として日本の大学で一生を終えることができないからである。遅かれ早かれ彼は就職の問題に直面しなければならない。特に、長男としてこの役目を果たさなければならない陶晶孫は、愛着を感じる日本ではなく疎外感を抱く中国で就職する以外には道がなかった。「暑假」にみられる〈二年後にどうしても中国に帰らなければならない（下線──引用者注）〉という語りは、正しく陶晶孫の当時の悩ましい姿を鮮明に映しだしている。

こうして、九州にいる間は東京に対する郷愁を一日も絶つことができなかった陶晶孫は、東北帝国大学に入学したことによって、地方都市と東京との間を放浪する心をやっと落ち着かせることができたと思った途端、今度は、日中両国の狭間に立たされ、両国の間を放浪することになったのである。

## 5　小結

同じく〈放浪〉をテーマにしながら、九州時代の作品とそれ以後の作品には、それぞれ異なる意味合いが含まれていることは、これまでの分析で明らかになった。いずれの放浪者の姿も時期毎の陶晶孫自身そのものを反映している。つまり、現実とかけ離れたようにみられる九州時代の作品であっても、自伝的な小説とみられる九州時代以後の作品であっても、これらに現れる主人公たちの思念は、同時期における作者自身の思いと一致しているのである。

ところで、本稿では1927年10月に出版された『音楽会小曲』について論じてきたが、それ以後の作品はどのように変わっていったのだろうか。1929年１月に帰国するまでの一年あまりの間に、村山知義の反戦人形劇「やっぱり奴隷だ」（『文藝戰線』 1927年７月号）を中国語に翻訳し、自らも反戦人形劇「勘太和熊治」（『創造月刊』1928. 8. 10）を書いた。プロレタリア文学としての色彩の強いそれらの作品は、『音楽会小曲』とは明らかに異質なものである。それは、帰国を控えた陶晶孫が、日本に残るか、中国に帰るかという苦渋の選択から解放され、一日も早く母国の軌道に乗ろうとする心境を映していると言えるのではないだろうか。これらの変遷についてはまた別稿で論じることにしたい。

## 注

1）〈運命〉については例外が一例ある。「音楽会小曲　春」から〈他也晓得一个女朋友的死、总不过是一个运命之戏（彼女の死がただ運命の悪戯にすぎなかったことが、彼にはわかっている。下線は引用者）〉という件が見られる。

2）中国語の〈放浪〉は〈気ままに振舞う〉を意味するが、陶晶孫の作品にみられる〈放浪〉は基本的に日本語の〈放浪〉と看做してよい。例外もあるが、それについては論文中で具体的に触れていく。

3）中西康代「陶晶孫初期作品集『音楽会小曲』と新感覚派に関する一考察」、『東京女子大学日本文学』(83号)、1995年3月、p116。

4）中村みどり「浪漫空間『日本』――陶晶孫『独歩』と『水葬』を読む――」、『言語文化論叢』、2002年12月、千葉大学外国語センター、p90。

5）筆者はこのような観点から九州時代の作品について考察してきた。主な論文は以下のとおりである。

①「陶晶孫と精神医学――『剪春羅』をめぐって――」(『熊本大学社会文化科学研究6』2008年)

②「『黒衣人』について」(『熊本大学社会文化科学研究7』2009年)

③「『運命』という視点からみた『木犀』と『洋娃娃』」(『野草』84号　中国文芸研究会2009年)

6）例えば、劉平「陶晶孫的文学創作及文学活動」(『中国現代文学研究叢刊』作家出版社、1992. 4、pp. 220～236)、朱偉華「唯美主義劇作『黒衣人』解読――兼論陶晶孫其人其文」(『中国現代文学研究叢刊』、作家出版社、2002. 1、pp. 231～239)、濱田麻矢「文化的"混血児"――陶晶孫与日本」(『中国現代文学研究叢刊』1996年第3期、作家出版社、pp. 220～228) 等。

7）小崎太一「陶晶孫と関東大震災」、『比較社会文化研究』第5号 (1999)、九州大学大学院比較社会文化研究科。

8）同上。p83。

9）前掲注5)。

10）本稿の引用文は特別の提示をしなければ、総て『陶晶孫選集』(人民文学出版社　1995) を参照し、日本語訳は筆者による。

11）陶晶孫「亡弟陶烈的略伝」、初版『学芸』第11巻第4号、1931年4月。『牛骨集』所収。『陶晶孫選集』、pp. 304～313。

12）「木犀」、「女朋友」、「両姑娘」などから見られる。

13）前掲「亡弟陶烈的略伝」で中学時代に触れられている部分で、陶晶孫は〈我们的根底都在这学校时候打定、回到中国来后的处世上有益无益是我们所不知道的、不过进切实学问的阶梯、都在这学校里得到的。〉と語っている。p305。

14）文章の前後の意味を考えるならば、原文中の〈他〉は〈她〉の誤植であろう。

15）前掲注5)。

16）前掲注5)。

17）「尼庵」に関する先行研究では専ら兄に力点をおく傾向がある。しかし、妹とこれまでの九州時代の作品に現れてきた主人公たちとの特徴が類似している点からみて、兄より妹の方に陶晶孫は自分の意念を仮託していることは明らかである。すなわち、「尼庵」においては妹こそが、陶晶孫の代弁者なのである。これについてまた別稿で詳細に論じたい。

18）注4）に同じ；p93。

19）特に表示しなければ総て作品が完成された日付である。執筆不明の作品は表示していない。

20）『音楽会小曲』の中で、同じ〈僕は支那人だ〉という台詞を用いている作品は「音楽会小曲」のほか、「両姑娘」と「独歩」がある。「両姑娘」の執筆時期ははっきりとしているが、「独歩」のほうは時期不明である。

21）詳しい内容は、拙著の「日本語習得が中国人の中国語文章作成に与える影響についての実証的研究」(『社会文化科学研究科学際的共同研究の拡充・推進プロジェクト報告書』、熊本大学大学院社会文化科学研究科、2008年7月) を参照。

22）確かに、これまで、「哈達門的咖啡店」と「Café Pipeau 的広告」の執筆時期が不明のため、「暑假」より前に書かれたか、それとも後に書かれたか、はっきり判断できなかった。一方、「Café Pipeau 的広告」の執筆時間について、上掲の中西康代氏は内容及び手法から考えれば、1925年９月号に掲載された村山知義の「或る戦」と類似しているとして、この作品が1925年に描かれたと推測している。しかし、〈放浪〉の代わりに〈漂流〉などと用いられていることから、両作品は早くても「暑假」以後に書かれたことが断定できるだろう。

23）「晶孫自伝」のほか、小説「木犀」、「女朋友」、「両姑娘」などからも、九州時代の生活に馴染めなかったことが垣間見える。

24）注10）に同じ、陶晶孫「晶孫自伝」；藤田敏彦「陶晶孫君を憶う」（『日本醫事新報』、No. 1815、昭和34年２月７日、日本医事新報社発行、p49。）

25）『創造社研究　創造社資料別巻』（伊藤虎丸編、アジア出版、1979年10月、p119）と『周作人日記』（周作人、大象出版社、1996、pp. 322～323）によると、上海と北京に滞在していたことがわかる。

26）注11）に同じ。「亡弟陶烈的略伝」に陶晶孫と弟陶烈は省から大学を卒業して二年間の実習費用をもらうはずだったが、一年しかもらわなかったと記されている。

27）小説「理学士」（『洪水』第一巻第六期、1925. 12. 1）に、省から奨学金をもらわなくなってから「庚子賠款補学費」（つまり、表２に1923年３月に発足された「支那学生学資補給」を指している）に申請したが、受からずに、生活に窮したすえに研究室の教官に相談したところ、助手として半給をもらえるようになったと書かれている。

28）「陶晶孫君を憶う」、注24）に同じ。これによると、帰国した原因は〈中国からの学資支給中絶の関係で、一度帰国し〉たことがわかる。厳安生氏は『陶晶孫　その数奇な生涯』（岩波書店、2009. 3、p258）において、今回の帰国が〈日本側の特選留学生の給費の期限切れのことだったのではないかと推測〉しているが、それは明らかに間違っている。

29）厳安生氏『陶晶孫　その数奇な生涯』（同上）において、「哈達門的咖啡店」に描かれている北京旅行は1925年の冬のことになると推測したうえ、〈作品はある根無し草的な人物の北京街頭放浪記で〉あると指摘している。また、厳氏は奨学金を含め、就職活動や北京旅行などが〈今ではほぼ特定不可能な事実関係〉であると論じているが、表２から事実と小説とを対照してみれば、作品は同時期における陶晶孫の投影と言っても過言ではない。

30）『周作人日記』、注25）に同じ、p424。

31）『在本邦留学生本邦見学旅行関係雑件　第一巻』（外務省外交史料館所蔵）に記されているように、陶晶孫が〈特選支那留学生〉として修学旅行の経費を申請している。こうしてみれば、1925年４月から陶晶孫は〈特選支那留学生〉として選ばれたことが推定できる。

32）小説「特選留学生」（『洪水』第二巻第十六期　1926. 5. 1）には、主人公無量は一冬を過ごしてからやっと日本外務省による特選留学生に選ばれたと書かれている。

33）注31）に同じ。

34）岡田英弘「陶晶孫伝稿」、『論集近代中国研究』（市古教授退官記念論叢編集委員会）、山川出版社、1981年７月、p60。

35）「学費補給民国留学生調　昭和三年一月」（『在本邦留学生関係雑件　第七巻』外務省外交史料館所蔵）に「中華民国学生中外務省に特選留学生として指名されたる人名」から〈江蘇　東北大　陶熾〉がみられる。

36）陶晶孫「晶孫自伝」によると、仙台にいた時、汽車に乗って東京にピアノを学びに行っていたことがわかる。前掲10）、p237。

37）詳細な内容については、前掲34）：澤地久枝「日中の懸橋　郭をとみと陶みさを」（『続昭和史のおんな』、文藝春秋、1986年８月）などを参照。

38）澤地久枝「日中の懸橋　郭をとみと陶みさを」、上掲37）に同じ。

39）新感覚派との関連性については、中西康代氏の論文「陶晶孫初期作品集『音楽会小曲』と新感覚派に関する一考察」がある。詳細についてはそれを参照されたい。前掲３）。

# The times of Jingsun Tao lived in Japan — How did the difference between works of Kyushu Times and ones after this period occur?

LIAO Liping

In the prior studies about Jingsun Tao, by integrating all the roams of his works through the times of his studying abroad, the scholars sketched out the figure of Jingsun Tao which wandered between Japan and China. However, in the present article, we used Kyushu Times as a boundary line and investigated how to classify all the works of Jingsun Tao by discussing the difference meaning of the roams during Kyushu Times and after this period.

By the careful analyses, the following result was drawn: After Jingsun Tao left Tokyo, he began his drift in the areas of Kyushu. Therefore, the roams of Kyushu Times expressed Jingsun Tao's feeling that he longed to live in Tokyo where he lived as ever and ran away somewhere to escape from reality; at the other hand, the roams of the works written after Kyushu Times were the same as mentioned in the prior studies and described the figure of Jingsun Tao who existed in the interval Japan and China and wandered between two countries. It was clarified that the difference of the two kinds of roams was due to the current social environment around Jingsun Tao and his personal thought but not the Great Kanto Earthquake as mentioned in the prior studies. Therefore, we proposed that the literature of Jingsun Tao should be classified by Kyushu Times as a boundary line.